「第27回住まいのリフォームコンクール」総評

コンクールの始まる前からリフォーム業界の盛況が伝えられていて、今年は応募者の多いことが予想されたが、今年は昨年よりも多い642点の応募があった。応募数の多さが内容の高さを表すものではないが、今年も入選作の決定には審査員一同苦心した。技術水準は高まっており、それは入賞作品の幅の広さと作品完成度の高さにも表れている。惜しくも入賞を逸した作品と入賞作品との差は極めて僅かなものに過ぎない。

今年の特徴は次の3点である。

①建築タイプや、リフォーム選択の周辺環境が昨年以上に複雑であった。

②地方色豊かな作品が多い。特に古民家リフォームは例年以上に目立った。

③耐震性、省エネ性などの性能向上を意識した家作りが行き渡ってきた。

古民家は、相応の費用と手間をかける場合が多いため、平均して素晴らしい作品が多かった。写真だけで見ると、上位賞を独占してもおかしくないほど粒が揃っていた。激戦区であるだけに内容が問われている。

他方、新たな世情を反映する作品、すなわち、投資や流通を前面に押し出した住人未定の住戸や、木賃長屋の再生、併設店舗を閉鎖転換した住宅、現住住宅の一部賃貸化、建替え不可住宅の長期優良住宅化なども増え、同じ土俵での審査はなかなか難しいものがあった。

本年度はこうした広がりも予測して専門的知識を持つ審査員の参加を得、コンクールの趣旨なども再確認しながら慎重に審査した。技術・デザイン面だけでなく、サステナブル社会における価値、地域状況に応じたリフォームの有効性、中古住宅の流通促進効果などソフトウェアに至るまで協議した。

結果として入賞作は、従来とは若干異なる印象になった。国土交通大臣賞は、標準的な施主像とリフォーム空間で、従来ならば上位賞には残らなかったかもしれない。しかし、若い世代が土地取得だけでも手一杯の状況の中、合理的リフォームを組込めば、都心居住も軽やかに考えられる可能性とその社会的影響の大きさ、リフォーム推進効果を強く評価に入れた。大臣賞以外の上位三賞作は、揃って地域性を色濃く反映している。技術の確かさや関係者の強い思い入れはもちろんであるが、風土や景観まで意識した、地方ならではのリフォーム文化が高いレベルに達している点を評価した。

応募作全体については、性能意識の高まりがはっきりと感じられた。性能向上の具体的な方法については曖昧な表現が多いのは残念であった。リフォームでは数値での押えがしにくいが、その効果についてもう少し具体的な表現がほしいものである。これは応募用紙の構成にもよるため、審査側の今後の課題となった。また、数年来書き続けていることであるが、法的詰めの甘い作品が依然としてある。法的疑義があるため入賞を見送らざるを得ない例があるのは残念である。

最後に、良いリフォームは、施主・設計者・施工者のよい関係によって生まれること、リフォームはベテランの力が大きいことを今年も痛感させられた。また、そのような作品が多数応募されてきたことをうれしく感じた次第である。

第27回住まいのリフォームコンクール審査委員会
委員長　上杉　啓